

～第43回北洋研究シンポジウムの講演から～

このシンポジウムは、昨年12月22日札幌市の北大学術交流会館で北大大学院水産科学研究所、水産海洋学会、(独)水産総合研究センター、そして私共道総研水産研究本部の共催で開催されました。

シンポジウムの目的は、水産王国北海道を取り巻く海洋環境や漁業の“今”を概観し、モニタリングや魚食の大切さ、さらには水産が秘める可能性に触れながら、北海道における水産の魅力と将来を考えることにありました。

講演は何れも興味深い内容でしたが、中でも特に強く印象に残り、当管内にも関連が深いと思われる講演2題をご紹介します。

1つ目は、「北海道の海の生物多様性保全と持続的漁業」と題する中央水研の牧野光琢さんの講演です。

牧野さんは、日本の漁業管理制度の特徴が長い歴史に裏打ちされた“漁民による共同管理”にあり、欧米など諸外国の“自由参入、政府による管理”と大きく異なっていること、この共同管理型漁業が、世界自然遺産知床の海域における生物多様性の保全に大変重要な役割を果たしていることなどを、明快に説かれました。

2つ目は、「魚食の勧め」と題する水産庁の上田勝彦さんの講演です。上田さんは「ウエカツ水産」の名で親しまれ、魚食の普及に日々奔走する型破りの公務員です。

この講演で上田さんは、若い世代の魚離れがもたらす危機的状況の意味、なぜ我が国にとって魚食の普及が重要なのか、そして魚食の魅力を生産者に伝え、日本人と魚との関係をつなぎ直す取組の必要性について、豊富な現場経験と沖縄漁業の衰退など深刻な実例を交えながら熱く訴えられました。

2つの講演に共通していたのは、多様な面での「漁業の重要性」。そして奇しくもお二人とも「漁業の将来は、如何に人間が自然の変化に柔軟に対応して行けるかに懸かっている」という話で締めくくられました。そのためにも、我々も含め関係者が海の状況をしっかりとモニタリングしながら、その変化を見極め、迅速かつ柔軟に対応できるよう備えて行かなければならないとの認識を新たにされた講演でした。

これら2つの講演記録を別途作成しましたので、お手すきのときにご一読頂ければ幸いです。

(網走水試 等々力)